W-2　「叙述類型論の諸問題」

【企画】

岩男考哲（神戸市外国語大学），益岡隆志（関西外国語大学）

【司会】

益岡隆志（関西外国語大学）

【発表者】（発表順）

三原健一（京都ノートルダム女子大学），岩男考哲（神戸市外国語大学），
鈴木彩香（国立国語研究所），由本陽子（大阪大学）

Ⅰ　ワークショップの趣旨

文を事態を叙述するものとしたとき,その叙述には2つの異なる様式が認められる。1つは特定の時空間に出現する出来事を叙述するものであり,もう1つは所与の対象の特性を叙述するものである。前者を「事象叙述」（event predication），後者を「属性叙述」（property predication）と称する。

従来の言語研究では，一般に，事象を叙述する文の研究に重点が置かれ，それを代表する動詞文の研究が大きな成果を収めてきた。それに比べ，対象の属性を叙述する文に対する関心は高くなく，それを代表する名詞文の研究も動詞文に比する成果を収めてきたとは言いがたい。そのような研究状況にあって，事象叙述と属性叙述を並置したうえで，それぞれの特徴を明らかにするとともに両者の関係を考察することが求められる。“コト（デキゴト）の世界”と“モノの世界”の両者を視野に入れたこのアプローチを「叙述類型論」と称する。

文の叙述類型の違いは文構成の様式に反映される。すなわち，事象叙述文は叙述の枠を定める述語を主要部とする内心構造を基本とし，そこに時間性を表す文法カテゴリーであるテンス・アスペクトが深く関与する。他方，属性叙述文は対象を表す部分と属性を表す部分が相互依存の関係で結びつく外心構造を基本とし，そこに主題（対象表示部分）と解説（属性表示部分）の関係が深く関与する。

そのような事象叙述文と属性叙述文をめぐる近年の研究（益岡編（2008），影山編（2012）など）により，叙述類型論の深化のために検討を要する諸課題が浮かび上がってきた。それらの課題を代表するものとして，（ⅰ）属性叙述の基本をなす「属性」という概念をより明確化していくこと，（ⅱ）属性叙述文に主題提示（提題）がどのように関わるかをより具体的に示していくこと，（ⅲ）事象叙述文を特徴づける文法カテゴリーであるテンス・アスペクトの叙述への関与のあり方を属性叙述文との関係のな

かで追究すること，（ⅳ）叙述類型の違いが文以外の領域においてどのような意義を有するかを検討すること，を挙げることができる。本ワークショップの目標は，これら諸課題に取り組むことにより叙述類型論のさらなる展開を図ることである。

Ⅱ　ワークショップの構成

本ワークショップでは，司会者による趣旨説明ののち，日本語を主たる対象として上記の課題に関わる 4 件の話題（以下の発表①～発表④）を提供する。すなわち，（ⅰ）の課題に関わって，発表①（三原健一「属性の起源」）では，属性の源をどこに求めることができるかを詳細に考察することにより「属性」という概念の明確化をめざす。発表②（岩男考哲「「評価属性」をめぐって」）では，（ⅱ）の課題に関って，「は」を用いた提題文と「ときたら」を用いた提題文を対象に，属性の一種である「評価属性」の内実がいかなるものであるかを検討する。

それに続く発表③（鈴木彩香「属性叙述におけるテンス・アスペクト体系」）では，（ⅲ）の課題に関わって，テンス・アスペクト形式の対立に対応する意味的な対立が存在することを明らかにし，属性叙述文を含めたテンス・アスペクトの体系を考える必要があるということを主張する。さらに（ⅳ）の課題に関わって，発表④（由本陽子「複合語形成における事象から属性へのシフト―「X＋動詞連用形」型複合名詞を中心に―」）では，「X＋動詞連用形」型複合名詞を主な対象として，複合語形成において事象から属性へのシフトが認められることを指摘したうえで，そのシフトのメカニズムを考察する。

上記の発表のあと，ワークショップ参加の方々との討議の時間を設けたい。発表内容に直結するコメント・ご指摘だけでなく，様々な言語に関するご教示をいただければ幸いである。本ワークショップでは日本語を中心とする話題提供となるが，叙述類型論は諸言語に開かれた研究課題であり，影山編（2012）にも中国語とコリャーク語に関する論考（沈力「中国語の付加詞主語文について」，呉人惠「コリャーク語の属性叙述専用形式―項から主題への変換のメカニズム―」）が収められている。多方面から関心をお寄せいただけることを願っている。

（文責：益岡隆志・岩男考哲）

引用文献

影山太郎編（2012）『属性叙述の世界』くろしお出版.
益岡隆志編（2008）『叙述類型論』くろしお出版.